

「知的障害特別支援学校における教育課程の編成と評価の一体化」

— 個別最適な学びを実現するための研究成果の運用および実践（展望） —

1. はじめに

中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）では個別最適な学びについて、「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」であると示している。また個別最適な学びを遂行するためには、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図ることに努める必要があると述べている。

令和4年度～令和6年度まで行なってきた3年間の研究（今研究）では、このカリキュラム・マネジメントの充実と強化を図り、個別最適な学びの実現に向けて以下のように段階的に取り組んできた。

1. 1年次の研究

1年次では、教育課程の評価として「授業の評価」に焦点を当て、その在り方を検討した。現行の学習指導要領に基づく学習指導案を活用して授業の見直しを行った。その中で得られた課題から、学習指導案の見直しを支援するチェック表が作成された。また考察のなかで2点の気づきがあった。1点目として、授業が学習指導要領に基づいて計画・実施されているか評価する必要があるということである。そして2点目は児童生徒の学習履歴や授業履歴を基にした指導の根拠を明確化する必要があるという点である。

そして、2年次の研究に向けてどのような学習履歴が必要であるか、また、それをどのように記録・管理していくべきかについて検討を進めることが課題として明らかになった。

2. 2年次の研究

2年次では、「系統的・組織的な授業計画とその評価」について検討を進めてきた。その中で系統的な教育計画として位置づけられているシラバスの作成に取り組んだ。シラバスを作成したことにより、本校で実施されている授業内容の視覚化を図った。

考察では、学習指導要領に基づいた系統性と本校の児童生徒の実態に応じた学習内容が、「系統的・組織的な授業計画」の要素として重要であることが確認された。また、シラバスは各教科の目標や「内容」を指導方法にまで落とし込み、児童生徒の学びの履歴を記録・活用する重要なツールとしての役割を果たすことも示された。

ただ、学習指導要領の「内容」が反映された単元の構築が可能になったものの、複数の指導段階の児童生徒がいる学習班では、単元計画が複雑になることが課題として挙げられた。

3. 3年次の研究

3年次では学習指導要領に基づく学習内容の系統性と、児童生徒の実態に応じた学習内容、学習方法、それに基づく支援方法を検討できる教育課程の各様式と評価項目を検討することを目的に研究を進めていった。その中で、教育課程の各様式づくりと教育課程の評価のチェック表づくりを通じて、児童生徒の学習評価と教師の授業評価の関係性を明確にするとともに、授業評価の中で教育課程の評価として引き継ぐべき内容を区別する視点を得ることができた。

しかし各様式の検討では個別の指導計画の様式検討までには至ることができず、また現状の個別の指導計画では児童生徒の学習状況を把握することは難しいということも明らかになった。

これまでの研究（図1）から得られた成果と課題をうけ、今年度はシラバスを活用した年間指導計画の作成や授業づくりを行うなど、シラバスから授業へのつながりを意識した運用の実践について検討を行っていく。

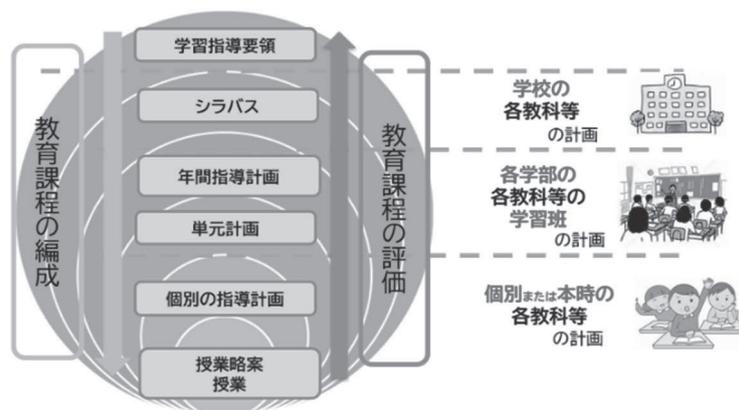


図1 令和4年度～令和6年度の研究デザイン

II. 目的

これまでの研究（令和4～6年度）で明らかとなった成果と課題を踏まえて、今年度の目的を以下の2点に設定した。

- ・シラバスを活用した授業計画づくりを定着させる。
- ・研究成果を踏まえた教育課程の実践とその運用に向けて、新たに着任した教員も含めて研究成果の理解を深める。

III. 方法

1. シラバスの完成

各シラバスを使って各教科の指導計画を作成、実践する。その過程で浮かび上がった問題や疑問をフィードバックし、カリキュラム・マネジメントの考えに基づいてシラバスまで戻り、翌年度に備える。

2. 個別の指導計画の新書式の検討・作成

3つの柱で表される個別の指導計画（成績表）の様式を作成・検討する。作成した新書式を活用し、全教科を網羅するように記入した後、記入の段階で出てきた課題や気がついた点を共有し、書式の項目のブラッシュアップを行う。

3. 研究成果の確認および意見交換を行う場の設定

新たに着任した教員も含めて3年間の研究の流れや成果を確認し、各教員の認識のすり合わせや理解の深化を図る。

IV. 結果

1. シラバスの完成について

各教科のシラバスを活用し、学校の教育目標や児童生徒の学びの具現化をめざす。まず1つ目の取り組みとして年度始めにシラバスをもとに年間指導計画の作成を行った。作成の中で気づいたことや困り感などを教科別に検討した。この検討過程で出た気づきや困り感は表1の通りであった。網掛けは困り感を示している。

表1より、教科の隔てなく共通した内容がいくつかあった。

表1 シラバスから年間指導計画を作成するにあたっての気づきや困り感

内容	気づきや困り感
授業づくり	① ・網羅しなければならない内容が明確になる。
	② ・座学的な教科よりも目標や観点は明確である。
	③ ・学習指導要領を見るよりシラバスを見たほうが授業を作りやすかった。
	④ ・数学は内容が多いのでシラバスをもとに授業を作成している。
	⑤ ・授業のヒントになる（領域）。
	⑥ ・授業の評価、ねらいが明確。
	⑦ ・題材と単元例、実施時期、行事との連なりがわかりやすい。

(表1のつづき)

内容	気づきや困り感	
引継ぎについて	⑧	・次年度への引継ぎはできるのか。(職業)
	⑨	・生徒の実態によってはシラバスがあることで学習計画の引継ぎがしやすかった。
	⑩	・今のシラバスでは何を実際にやったかが履歴として見えないので履歴と記録ができるといいな。
	⑪	・反省と引継ぎの項目に様子がくわしく書かれていてよかった。
作成にあたって	⑫	・シラバスの内容を確認しながら作成できたことがよかった。
	⑬	・段階、領域が最初書きにくかった。
	⑭	・シラバスは項目がまとまっていたので年間指導計画におこしやすかった。
	⑮	・グループ内での実態がバラバラ…書き方に悩んだ。
	⑯	・生徒の実態が学部・学年の段階にそぐわない。
	⑰	・段階の横のつながりを意識しづらい。
	⑱	・シラバス→年間指導計画のプロセスをあまり意識できていない。
	⑲	・生徒の実態によってAパターンでの考え方が難しい。

この⑲で示されているAパターンとは表2に示しているシラバスの在り方の1つである。履修モデルと呼ばれるAパターン(表2)と、習得モデルと呼ばれるBパターン(表3)があるとすると、一般的な特別支援学校のシラバスはBパターンで作成されている。本校は、今研究ではAパターンを採用している。

表2 シラバスの在り方(Aパターン)

A	小1段階	小2段階	小3段階	中1段階	中2段階	高1段階	高2段階
小学部	○	○	○				
中学部				○	○		
高等部						○	○

表3 シラバスの在り方(Bパターン)

B	小1段階	小2段階	小3段階	中1段階	中2段階	高1段階	高2段階
小学部	○	○	○				
中学部	○	○	○	○	○		
高等部	○	○	○	○	○	○	○

2. 個別の指導計画の新書式の検討・作成について

昨年度までの研究、そしてシラバスから年間指導計画を作成する際にも認められた課題として、本校では児童生徒の学習状況を記録する方法が確立されていない点が挙げられる。特に、授業担当者が変わった場合に学習状況が把握しにくい記録の状況にある。この課題を解決するために必要な役割を果たすものが、この個別の指導計画である。

また個別の指導計画には2つの位置づけがあることが昨年度までの研究で明らかにされている。1つ目は「指導の手だて」としての位置づけである(図2)。2つ目は、「学習履歴」としての位置づけである(図3)。

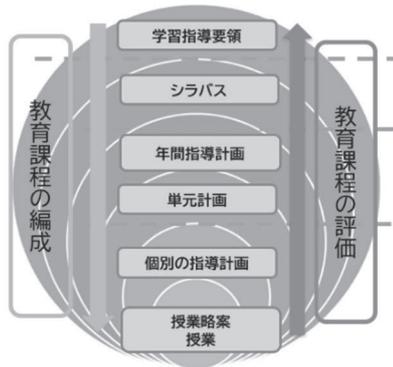


図2 教育課程における「指導の手だて」としての個別の指導計画の位置づけ

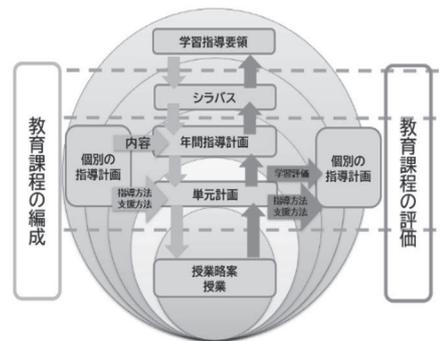


図3 教育課程における「学習の履歴」としての個別の指導計画の位置づけ

この2つの位置づけを意識しながら、教務部とともに資料1の作成を行った。その資料1を活用し、各学部それぞれ担当している教科ごとに個別の指導計画の作成作業を行い、作成するなかで気づいた点や困り感などをアンケートで集約した。アンケートに示された内容を項目ごとに5つに分類をした。アンケートの集約結果は図4および表4の通りであった。

表4に記載されている指導目標とは学習指導要領が示す各教科各段階の「目標」を参照し、各児童生徒に応じた目標として示したものである（段階目標）。また領域が多岐に渡る教科や、児童生徒の実態として下学部対応を必要とする教科については、下学部の段階目標を参照・抜粋し、調整した段階目標をその教科の指導目標とする。

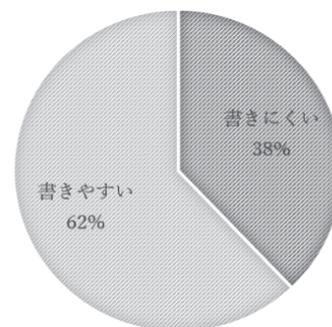


図4 アンケート項目Ⅰ 新書式について【書きやすさ】

表4 5つの項目で分類したアンケート結果

内容	気づきや困り感
指導目標について	① ・他の項目との繋がりがわかりにくい。
	② ・指導目標は大きすぎる。
	③ ・個別性を出す方が保護者から見ても分かりやすいかなと思う。
	④ ・数学は指導領域が大きく分けて4つあり、網羅的に書くことは難しい。
	⑤ ・目標が大きすぎて、具体性がほぼない。単元目標の方が良いと思う。
単元・題材・教材について	⑥ ・音楽のシラバスでは文部省唱歌や分担奏などと大きなカテゴリの文言が並ぶので、より具体的な曲名を書けるように「主な題材・教材」としてはどうか。
	⑦ ・指導目標に対する評価の場合、●は早い段階では付けられない。
評価の記載について	⑧ ・記入欄が小さい。一番重要な評価そのものについての記述が足りない。
	⑨ ・評価補足欄も評価という名称でいいのではないか。
	⑩ ・記入字数が少なく、書きにくい。
教科ごとの課題について	⑪ ・キャリア（職業）はシラバスと直接連結していないことが課題である。
	⑫ ・キャリア（職業）は担当者が代わると方向性が担保できなくなるのではないか。
	⑬ ・算数数学は知識技能が基礎なので、これを習得しないと思考力・判断力・表現力等には進めない生徒も出てくるので難しさを感じた。

このアンケートの結果を受け、再度個別の指導計画の新書式について検討を行った。検討の際に4つの項目に着目し、検討を進めていった。検討過程での意見や気づき、そして結果・考察は表5の通りである。またその意見や気づきをもとに作成した個別の指導計画の新書式の改訂案を資料2に示した。

表5 意見や気づきをもとに考察した結果

内容	意見や気づき	考察・結果
指導目標関連	・段階目標だと目標の範囲が広すぎて、どの内容について書いているのかわかりにくい。	<ul style="list-style-type: none"> ・単元目標を指導目標として記載する。 ・単元目標とはシラバスの単元計画の「3.単元の評価規準・基準と学習評価欄」の評価基準を基にして作成する（語尾を変換して記載する）。
	・個別性がない。	
	・評価とのつながりがわかりにくい。	
	・保護者の視点に立ったときに理解することが難しいのでは。	
単元・題材欄関連	・教科によっては単元と題材の両方とも列記する方がよい。	<ul style="list-style-type: none"> ・基本は単元を列記する。 ・教科や子どもの実態に応じて単元や題材、教材などを組み合わせて、箇条書きにする。 ・評価するものだけでなく、主だったものを書く。
	・現行の指導計画は全ての単元を列記している。	
	・題材を記入することで、何をしたのか保護者もより理解できる。	
評価・評価補足欄関連	・記号表記は継続して行っても良いと思う。	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の手だてを組み入れて、100字以内で様子を記入する。 ・記号の評価と記述の評価をまとめて【評価】という欄に変更する。
	・どんな指導、手だてを行ったかが重要。	
書式・分量関連	・各学部や教科、そのときの単元によって書く分量は変わってくる。	<ul style="list-style-type: none"> ・3教科分を1枚にまとめる。 ・文字の大きさは10ポイントで揃える。 ・段落においては左詰め、中揃えで調整する。 ・評価の字数は100字以内に収める。
	・空白があり過ぎるのはよくない。	
	・各項目の繋がりがわかる方がよい。	

3. 研究成果の確認および意見交換を行う場の設定について

方法1と2を進めると同時に今研究についての研究成果を確認し合う場を設定した。そのなかで本研究に用いられている言葉の意図についての疑問が浮かび上がった。そこで再度、言葉の意図について整理を行い、用語集として表にまとめた（表6）。

表6 本研究における用語とその意図

用語	意図
シラバス	学習系統表→どの内容を、どの順番に、どこまで教えるのかを見通すもの
単元	学習目標を達成するための有機的なまとまり
題材	単元（学習目標を達成するための有機的なまとまり）を構成する「内容のまとまり」や種目・・・（やること）
教材	各学習を教えるためのもの・・・（やるもの）
自立活動の支援	学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服する力をつけるための支援方法
学習の支援	学習目標を達成するための工夫や補助、準備内容 自立活動の支援が含まれることもあるが、日常生活の支援と区別する
規準（のり準）	Criterion（目標に対する拠り所・規範）・・・全体への指導目標
基準（もと準）	Standard（判定のための拠り所）・・・個の到達度
個別的教育支援計画	長期的な支援を目的とし、全体的なニーズを把握するための計画
個別の指導計画	具体的な指導方法や目標を定めるための計画

IV. まとめ

今年度は本研究の成果や浮かび上がった課題を考慮し、シラバスを活用した授業づくりを行っていくことをめざして実践を進めてきた。そのなかでも以下の2点が今後のカリキュラム・マネジメントや教育活動に繋がる成果であった。

1. シラバスの活用

今回、シラバスから年間指導計画を作成するなかで気づいたことや困り感を共有した。そこではシラバスがあることで授業の構成や計画を立てやすくなったり、教科書と連動していることでより系統立てた授業実践ができたりと授業を考えたり、作ったりする上で重要な役割を果たしていることが再確認された。特に新しく着任した教員にとっては今までの授業実践を容易に理解できるものとして活用されている。

しかし、表2の⑮⑯⑰にあるように生徒の実態によってはシラバスを活用することへの難しさが生じる。その際は児童生徒の実態によって下学部段階のシラバスを参照し、「基準（もと準）」の考え方を組み合わせて活用するという考え方が必要である。

また、引き継ぎの面の困り感も表2の⑧と⑩で述べられている。各教科で実施する内容についてはシラバスに記載されているが、昨年どのような単元で、どの教材を使用して、どうだったかという履歴が具体的には記載されていない。そこで重要になってくるものが次の個別の指導計画である。

2. 個別の指導計画の在り方

個別の指導計画の新書式の作成にあたって、「指導の手だて」としての側面と「学習履歴」としての側面を意識した気づきや困り感の意見交換を行った。そのなかで表5の②③⑤⑧の意見は「個別性」を担保することが重要であると示唆している。この点については単元計画を活用し、基準（もと準）の考え方を組み込むことで、児童生徒、保護者、また学校の共通理解を図ることができると考えられる。これには単元計画の活用と充実が必要であり、さらに教員の入れ替わりが多い小規模校の本校では、個別の指導計画を作成するための新転任者へのフォローアップが個別最適な学びにより一層繋がると考えられた。

3つの柱の目標を設定し、単元計画をもとに作成することで「指導の手だて」「学習履歴」としての位置づけを確立した個別の指導計画とするために、今後も実践・運用を継続していくことが必要となってくる。

そして、カリキュラム・マネジメントに基づく個別最適な学びを継続的に実現していくために、今年度の実践や本研究で得られた成果を引き続き活用し、その取り組みを地域の学校へと広げ、知的障害教育のさらなる発展に貢献していきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導助言者である本学特別支援教育部門の今枝史雄先生に貴重な時間を割いていただいてご指導、ご鞭撻を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 安彦忠彦 1993 現代学校教育大事典 東京行政
- 皆見英代 「規準」と「基準」・‘criterion’ と ‘standard’ の区別と和英成功一教育評価の専門用語和訳に戸惑う一。国立教育政策研究所紀, 137, 273-281
- 菅野敦・城田和晃 2020 特別支援学校新学習指導要領 学びの地図の構築と各教科の授業づくりモデル 明治図書出版
- 文部科学省 2017 小学校学習指導要領解説 総則編
- 文部科学省中央教育審議会 2021 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）
- 文部科学省 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（参考）履修主義と修得主義、年齢主義と課程主義
- 大阪教育大学附属特別支援学校 2023 研究紀要. 第2号 11-18
- 大阪教育大学附属特別支援学校 2024 研究紀要. 第3号 11-22
- 大阪教育大学附属特別支援学校 2025 研究紀要. 第4号 11-26
- 東京都教職員研修センター 2025 紀要 第24号

ひな形

【前期】

■学部 (△) 年 名前 (附属 太郎)

三観点：ア 知識及び技能 イ 思考力・判断力・表現力等 ウ 学びに向かう力、人間性等
 評価：●十分に達成できた ○概ね達成できた ◎支援や活動の工夫で達成できた

指導目標		主な単元名	主な題材	
指導目標			評価	評価補足欄
イ		ア	イ	
ウ				

指導目標		主な単元名	主な題材	
指導目標			評価	評価補足欄
イ		ア	イ	
ウ				

資料2 個別の指導計画（改訂版）

【前期】 小学部（○）年 名前（ 附属 太郎 ）

三観点：ア 知識及び技能 イ 思考力・判断力・表現力等 ウ 学びに向かう力、人間性等
 評価：●十分に達成できた ○概ね達成できた ◎支援や活動の工夫で達成できた

教科	学習内容	指導目標		評価
国語	・声に出そう（「いろは歌」 「あいうえお」「おーい」 「たんぼぼ」「かたつむり」 「どん、どん、どん」 「おみず」 ・もじをさがそう ・もじを書こう	ア	様々な物の名前をひらがなで書くことができる。	○ 平仮名表を近くに置いておき、分からない時に表から探すように促すと、自分で表を見ながら名前を書くことができた。
		イ	文字を書くときに、平仮名表から正しい文字を選ぶことができる。	○ 選んだ物の正しい名前を一緒に言いながら確認し、それから平仮名表を使うように促すと、自分で正しい文字を選ぶことができた。
		ウ	自ら書きたい物を選び、表を活用しながらその名前を書こうとすることができる。	○ わからない文字があっても自分で表を見て、適切な文字を探し、表を手本としながら、自分なりに平仮名を書くことができた。
算数	・ ・	ア		
		イ		
		ウ		
音楽	・ ・	ア		
		イ		
		ウ		